

第2回リビングラボシンポジウムメモ

ハイレベル・セッション「浜通り地域等におけるリビングラボの方向性」

石垣参事官) (リビングラボ宣言について石垣参事官から説明)

宣言を5つの要素に分解している。1つ目は「共に」で、復興も地域再生も役所だけでなくみんなで考える時代。産官学民が連携することが大事。次に「新しく」で、今回はDX関係の提案が多かったせいもあるが、リアルの空間で実践したいというニーズが多かったので、新たなチャレンジに対応する。次は「みんな」で、浜通りはコミュニティについて難しい課題を抱えている。コミュニティを作り直す必要がある中で、誰も取り残さないことが大事。次は「幸せ」で、当然のようではあるが、生活環境をよくするということで、このような目的としている。そして「いつまでも」で、大事なふるさとを次の世代に引き継いでいくということが基本。浜通りの復興や新しいモデルを全国や全世界に発信していくことが、エフレイの研究分野の1つに入っている大きな理由と考える。今回の浜通りの復興の取組をいつまでも子供たちに、また横に広げていくということは大きな目標なので、理念として掲げた。

小山先生) リビングラボ宣言の5つのコンセプトを踏まえて、地元の自治体から生活やまちづくりの課題をお話しいただきたい。

富岡町長) 原発事故で全町避難を経験し、平成29年4月の避難指示解除以降、復興に懸命に取り組んできた。今年2月の人口が11,523人、町内居住者が2,335人、率にして20.3%。町の北東部には現在も帰還困難区域が残されており、町内全域の避難指示解除により早期に均衡ある発展を成し遂げるのが悲願。今月16日には、特定帰還居住区域復興再生計画が内閣総理大臣に認定され、来年度から除染やインフラ復旧が行われる予定。リビングラボに2点期待している。

1つ目は、昨年4月に避難指示が解除された夜の森地区のまちづくり。この地区にある桜並木は全長2.2キロで420本のソメイヨシノが一斉に咲き、多くの客でにぎわう観光名所。空が見えないほどの桜のトンネルだったが、現在は所々隙間が見え、木の勢いが落ちている。地域開拓の時代からの木が老木となってきていることや植樹の環境によって生育状況が異なっていることが原因だが、子孫の代まで桜を残すためには計画的な植え替えが必要。リビングラボの取組のなかで3D都市モデルの構築をしていただいたが、桜並木の効率的な維持管理や地域の魅力発信、さらには地域の魅力向上につながるのではないかと大きな期待をしている。事業者の皆様にお礼申し上げる。桜祭りが4/5、6に開催予定で準備を進めている。多くの方のお越しをお待ちしている。

2つ目は「楽しい」を増やすということ。生活インフラは概ね整ってきてい

るものの、生活をしていくなかでは、趣味や娯楽の力が大事。スポーツによる賑わいづくりに取り組んでいるところで、多くの方に楽しんでいただきたいと考えている。また、若い人が取り組める催しやおしゃれなどについては、民間の力をお借りできればと考えている。

最後に、とみおかワーキングベースの紹介をしたい。昨年9月にオープンした施設で、ビジネスや研究等の拠点として、専用個室やコワーキングスペースを備えており、多言語対応可能な職員が常駐している。国道6号に面した便利な場所にあるので、浜通りで活動拠点をお探しの方はご相談いただきたい。

浪江町長) 浪江町の震災前の人口が約22,000人で、現在の町内居住者が2,200人弱。皆様のご協力で復興が大きく進捗している。浪江駅東側で行われている一団地事業は、隈研吾先生の設計で交流施設や公営住宅が建設される予定で、令和8年度完成予定。駅の西側には、エフレイができる予定。

本日6つの実証事業の報告があったが、私は町長としてすべて評価する。浪江町だけでなく、今復興を成し遂げようとする被災市町村に必ず必要なものだと思う。本日先生方にご指摘いただいたもので、広域という視点があった。私もそれに共鳴する一人。震災前、双葉郡の人口は8万人強だったが、現在は15,000人強。行政が今すぐ求められていることたくさんある。町民、移住した方々、町外に避難している人々の声も大切。それらに行政サービスとして対応するにはデジタルが必要。被災地で今何が必要か、同様に悩んでいることは何か、共通の悩みをデジタルで解決できないか、行政として今までと異なる変わった考え方を持つことが実証の成果を上げると思って発表を聞いていた。今後、実証事業を進めるにあたり、今まで以上に行政の目線でやるべきことが多くあり、町民の目線も大事、皆様の実証を成功させるにはそれらが必要と考える。

エフレイが浪江にできるが、浪江だけのものではない。目的が大きい。今後、高齢化など社会の環境が変わり、様々な知見も変わる、そういった多岐に渡るものに対応する優秀な研究者が世界から集まる。波及という、8町村が自分達の町に何を作ってくれるのかという話になるが、それもあるが、私はそうではなく、我々が共通した課題を解決することで、波となりうねりとなり、それが波及であると考えている。浪江町の課題、双葉郡の課題、浜通り、県、東北の課題がしっかり目に見える形でエフレイで研究されて次の時代を担う。13年経ってここまで復興してきたので、しっかり復興した形をエフレイを通して日本や世界に発信し、恩返ししたい。コンセプトは「広域」であると私は考えていた。本日は、すばらしい報告いただいた。復興庁、県、事業者にご挨拶申し上げます。

小山先生) 民間企業の立場として、今回のリビングラボの取組に自ら手をあげたのは、どのようなことを期待して参加したのかを聞かせていただきたい。

野崎社長) どのようなことを期待しているのかについて、関係者がワンチームになってい

る、総合的なまちづくりにチャレンジしている、15市町村、複数の民間、多数の住民、産学官民がワンチームとなって復興を成し遂げる、チャレンジングな取組に期待し、ぜひ参画したいというのが動機。弊社のコンサルティングサービス、技術サービスの蓄積を復興に活用して少しでも貢献したいと思い参画を決意した。

では、会社としてどんな実績があるか少し紹介する。7つの事業を実施しており、本日はこの会に関係ありそうなものを抜粋して紹介する。まず、道路、橋梁やトンネルの計画設計、老朽化が進んだインフラの維持管理に係る調査設計、それらのマネジメントの仕組みを作るシステム開発。流域管理保全事業、防災事業、陸前高田では復興に参画した。また、地域交通を円滑にするためのデマンド型の配車サービスや自動運転など多様な地域サービスへの対応。地域創生については、地域活性化の環境整備として、計画から設計や管理まで行っている。さらに、自ら投資し宿泊施設の再生に係る計画設計運営を行っている。これらの事業で得た経験を駆使して少しでもこのリビングラボの取組に貢献できると考え参画した。

浅川専務) フジタは、1910年に広島で創業した建設会社。1985年に都市開発事業を強化し、全国でまちづくりに関与してきた。まちづくりの例として、津田沼の奏の杜、大宮のソニックシティ、西新宿タワー等の施工を実施。福島では、寿泉堂総合病院も入るフロンティアタワー郡山の再開発を実施している。震災後の福島県では、檜葉中改築、産業技術総合研究所の懸鼓湯施設整備、相馬道路のトンネル、飯舘村の除染、現在は大熊の中間貯蔵家屋の解体を行っている。

まちづくりを通して福島の事業をずっとやってきた中で、今回、浜通りリビングラボを知って参画した。工事が多い時は地元の建設会社と一緒に事業を行うが、震災から十数年経って仕事が減る中で地元企業の多角化に貢献したい、地元企業に力をつけてもらいたいと考えた。また、デジタル技術は使わないと古くなるので、こういった機会にバージョンアップできることも楽しみで今回参画させてもらった。

小山先生) エフレイの山崎理事長にはリビングラボに期待すること、考えていることをお話しいただきたい。

山崎理事長) 今回リビングラボの取組を初めて聞かせていただいた。普通の町ではなく、マイナスからのスタートで、それをはねのけて日本一住みやすい町にする取組はハードルが高いと思った。私は、技術者として、ディープレック、すごいものを創れば世界で売れると思っていましたが、今日の発表は、人間が最後に満足感を抱くのは心の豊かさに落ち着くということで、それをどう醸し出すかというところに落ち着くのかというのを思い知らされた。性能だけを追求した日本のものづくりから何を言えるか、例えばスマホはハードもさることながらソフト、アプリというサービスがすごい。同じスマホでも入っているアプリが異なればまったく違う

ツールになる。リビングラボについては、マイナスからのスタートを通常に戻す必要がある。ハードをそろえることが大事だが、まだそれもできていない段階。

エフレイは、昨年4/1に法人としてスタートした。本施設は浪江駅の西側に位置する用地に国がこれから建設する。我々のミッションは研究であり、その成果を活かした産業化、人材育成、さらには研究機関のコーディネート。研究は5つの分野があって、5番目の分野は最終的にはまちづくりにつなげたい。放射性セシウムの濃度がどう変化したかについて環境動態計測としてデータを集めて、今後どうなるか予測しながら世界に発信していくが、最終目標はまちづくりと考えている。放射能汚染からの環境回復と環境改善に係る動態計測とデータベース化を基本とする一方で、コミュニティの合意形成のような社会科学的な研究を推進し、未来のまちづくりに貢献したい。住民の帰還支援と帰還後のまちづくりを想定している。

今後5～7年かけて500人ぐらいのエフレイの研究者が、職員を含めると700人ぐらいがこの地域に来ると予想しているが、みんなが住みよい地域をどう作るか。今日いろいろ勉強させていただいたが、交通、住環境、教育、医療などが重要。500人の研究者のうち3分の1が外国人を期待しており、二か国語対応（日本語・英語）も期待する。地域全体で受け入れる体力があればと期待をしているし、自分達もどう動けばいいか決めていければと考えている。

小山先生)リビングラボの5つの宣言について、2つの自治体からコメントをいただきたい。

富岡町長) すごくいい案だと思う。浜通りが抱える共通課題に対して、みんなで作って
いこう、「魅力あるふるさとを目指して、チャレンジをする浜通り」というのが
とても良い。町では、令和7年度から10年計画の第3次災害復興計画の策定に入る。町民の幸福度をあげていくということを含めて楽しいまちづくりを進めたい。現在の町の居住者2,300人の半分以上が移住者。帰還者と移住者の垣根をと
っばらって、みんなでまちづくりを進めて行く、というのが大きな課題。昔からの住民も新しい住民も多様なバックグラウンドを持って地域を作るというのがいい方向だと思うので、本日はこの宣言を出していただき大変ありがたいと思う。

浪江町長)先ほどの発表内で浪江の紹介がほとんどできなかったが、浪江町のホームページをぜひ見て欲しい。水素含め様々な実証に取り組んでいる。リビングラボ宣言に非常に共鳴する。震災後、過去に経験のないことをいっぱいやらせてもらっていて、これからも町民全体が経験をしていく。震災前22,000人いた人口が現在2,200人弱で、復興を進めていくと、震災前の人口よりも移住者の方が増えるという、今まで経験のないことがおそらく起こる。そこで、新たなことにチャレンジしていく。復興という、先人が作り上げた歴史を忠実に後世につなげていく役目が我々にある。そういった次第であり、5つのコンセプトの宣言が非常に大

切。

野崎社長) 非常に重要なポイントについており、宣言に賛同する。スマートシティの形成を浜通り、富岡、浪江の皆様と取組をしていきたい。それにはデジタルの力が重要。また、関係者がワンチームになることが非常に重要。5つの要素の中で、「共に」とあるが、行政・民間・住民が広域のエリアという視点が大事で、それを解決するにはデジタルの力が大きい。関係者の思いの強さが成功に導く。いつまでもみんな幸せになるという思いが強ければ成功につながる。

浅川専務) 広島では終戦から79年経ち、語り部が減ってきていて、記憶の風化が危ぶまれている。創業の地で何かできないかと考え、VRで被爆当時から復興していく様子を、悲惨な記憶を将来へ記録に残すことにした。大学や行政に協力いただき、官学民連携でツアーを作った。G7サミットでこのVRを動かし、各国首脳に見ていただいた。午前中、とみおかアーカイブミュージアムを見学したが、そのようなところにも展開できると感じた。また、東広島で広島大学と産学官でスマートシティに取り組んでいる。このノウハウをエフレイに提案しながら進めていければと考えている。

山崎理事長) 5時を過ぎたら普通の住民でありたい。コミュニティにどう溶け込むか。研究者や職員が同じ思いで地域に根を下ろしていきたいと思う。これを目指す時に、みんなに「常磐カリフォルニア」と呼んでほしいと思っている。雪が降らず暖かいと言いつつも結構寒くて最近カリフォルニアというのを迷いはじめてはいるが、震災後に始まったワイン作りや、常磐ものもそうだが、みんなの思いを統一するフレーズがあるといいと思う。本日は、いい機会になった。

石垣参事官) 皆様にご賛同いただき、ありがたい。これまでの議論を拝聴していて、「広域連携」が抜けていることに気が付いた。共通の課題だと思ったので、宣言に加えたい。

小山先生) 「共に」の部分に広域が入ると思うので、進めながら考えればと思う。

自分の紹介を少しすると、私は福島大学の食農学部にいる。この学部は国立大学で47年ぶりにできた農学系学部。

リビングラボについては、地域との関わり、住民の参画、住民といっしょに次の戦略を含めてビジョンを考えるということがあった。これまで企業もそれぞれ入ってきているが、全体の連携が足りなかったということが、地元の方からも指摘されてきた。今回のリビングラボはそこを踏まえていろいろ考えられているのがいいと思った。

人口減少の話が吉田町長からもあったが、福島大学で1200年代から東北の市町村がどうやって人口増減をしてきたのかを調べたところ、住民の入れ替わりが結構あったことが分かった。災害や火事で1回住民がゼロになり、そのたびに新しい住民が畑や田んぼを作り直したりして、この繰り返しをしていた。先祖代々

1000年やってきた土地というイメージがあるが、実は自然や資源を共有しながら地域を作ってきたということが改めて確認できた。そういう意味で、今我々が取り組んでいるチャレンジは1000年前から同様のことをみなさんでやってきたということを住民の方々と話し合いながら進められる必要があると思う。震災後13年間、環境の変化への対策をしてきたが、今後その変化に適応した施策や開発をする上で、リビングラボ5つの宣言は重要だと思った。

以上